

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

向社会的な嘘の個人間機能と個人内機能

氏 名

田口 恵也

論 文 内 容 の 要 旨

「オオカミ少年」や「金の斧」の寓話、「嘘つきは泥棒の始まり」という諺が象徴するように、人は嘘をつくことを避けるべき行為であると捉えている。その一方で、嘘は日常の中で頻繁に観察されている。嘘に関する心理学的研究からは、嘘は、社会生活を送るうえで役立つ機能を備えていることが示されてきた。また、嘘の中でも、発言者が他者のためにつく向社会的な嘘は、対人関係を円滑にする社会的潤滑油としての機能を有していることが指摘されてきた。

しかし、先行研究では、主に、発言者と被発言者の二者関係における向社会的な嘘の機能が扱われており、向社会的な嘘が周囲を取り巻く人々との間でどのように機能するかについては十分には検討されていない。また、対人関係の良好さのような、向社会的な嘘の個人間機能についてはこれまでも検討されてきたものの、精神的健康のような、個人内機能については明らかにされていない。そこで、本論文では、向社会的な嘘の社会生活における機能を明らかにするために6つの研究(研究1~6)を実施し、個人間機能については周囲の第三者の評価の観点から、個人内機能については発言者の精神的健康の観点から検討を行った。

第1章では、向社会的な嘘に関する心理学的研究を概観し、向社会的な嘘の機能に関する理論的背景を整理した。そのうえで、先行研究における課題の所在を明らかにし、本論文の目的を示した。

第2章では、大学生を対象とした3つの研究(研究1~3)を通して、第三者の評価の観点から、向社会的な嘘の個人間機能について検討を行った。研究1では、嘘をつく動機が嘘に対する第三者の評価に及ぼす影響について検討を行った。その結果、嘘をつく人は、真実を伝える人よりも正直さと勤勉性が低いと評価されること、向社会的な嘘をつく人は、利己的な嘘をつく人や、真実を伝える人よりも思いやりと協調性が高いと評価されることが示された。研究1の結果から、向社会的な嘘が、利己的な嘘よりも肯定

的に評価されることが確認された。研究 2 では、嘘をつく方略（偽装、隠蔽）が向社会的な嘘に対する第三者の評価に及ぼす影響について検討を行った。その結果、作為的に事実とは異なることを伝える偽装は、不作為的に事実を伝えない隠蔽や、他者に不利益のある真実と比べて、より道徳的で許容できると評価されることが示された。研究 3-A では、発言者の自己利益の有無が向社会的な嘘に対する第三者の評価に及ぼす影響について検討した。その結果、嘘をつく動機に自己利益を含まない向社会的な嘘は、自己利益を含む相互利益的な嘘と比べて、道徳性、許容度、信頼性、好意度のいずれにおいても高く評価されることが示された。また、向社会的な嘘は、好意度については、他者に不利益のある真実よりも肯定的に評価された。しかし、道徳性、許容度、信頼性については、他者に不利益のある真実の方が、向社会的な嘘よりも肯定的に評価された。他者に不利益のある真実が向社会的な嘘よりも肯定的に評価されたという結果が、嘘をつくことに対して否定的な認識を持つ参加者が多かったために生じた可能性を検証するため、研究 3-B では、嘘をつくことに対する否定的な認識と各発言の評価の関連について検討を行った。その結果、いずれの発言の評価（道徳性、許容度、信頼性、好意度）においても嘘をつくことに対する否定的な認識による違いは見られなかった。

研究 1～3 から、向社会的な嘘は、第三者から肯定的に評価されるものであり、円滑な対人関係の構築・維持に値する人物であることを周囲に伝えるシグナルとして機能することが示唆された。研究 2, 3 の結果は、事実を伝えない隠蔽よりも、事実と異なる情報を伝える偽装の方が肯定的に評価されること、また、動機に自己利益を含む相互利益的な嘘よりも、自己利益を含まない向社会的な嘘の方が肯定的に評価されることを示すものであった。ここから、特に向社会的な意図が第三者にとって明確である場合に、向社会的な嘘は第三者との関係を良好にする可能性が示唆された。その反面で、真実の伝達によって他者が傷つくとしても、向社会的な嘘をつくことよりも真実を伝えることの方が好ましく評価される場合があることも確認された。以上より、向社会的な嘘は常に肯定的に評価されるわけではなく、状況を問わず利用した場合には、かえって対人関係を悪化させる可能性のある諸刃の剣であることが示唆された。

第 3 章では、向社会的な嘘が持つ個人内機能について明らかにするために、大学生を対象とした 2 つの研究（研究 4, 5）を実施し、向社会的な嘘と抑うつとの関連、およびその過程について検討を行った。まず研究 4 では、嘘の使用傾向と抑うつとの関連について検討を行った。その結果、向社会的な嘘は、友人関係を良好にすることで抑うつを低下させるものの、友人関係の良好さを統制した場合には、向社会的な嘘を用いているほど抑うつが高くなることが明らかになった。研究 5 では、向社会的な嘘の使用が抑うつを高める原因として対人疲労感に着目し、向社会的な嘘と抑うつとの関連の過程について検討した。その結果、研究 4 と同様に、向社会的な嘘

は、友人関係を良好さにすることで抑うつを低下させること、また、向社会的な嘘を用いているほど抑うつが高いことが示された。しかし、向社会的な嘘と対人疲労感の間には関連が見られなかったため、大学生においては、対人疲労感以外の要因によって、向社会的な嘘が抑うつを生起させることが示唆された。

第4章では、向社会的な嘘が持つ個人内機能についてさらなる検討を行うために研究6を実施し、中高生を対象に向社会的な嘘の使用と抑うつとの関連、およびその過程を調べた。また、向社会的な嘘の使用傾向の発達差についても検討を行った。その結果、大学生と同様に、中高生においても、向社会的な嘘を用いているほど抑うつが高いことが明らかになった。さらに、向社会的な嘘の使用と抑うつが関連する過程については、大学生とは異なる結果が得られた。まず、中学生と高校生のどちらにおいても、向社会的な嘘の使用が対人疲労感を介して抑うつと正に関連することが示された。次に、中学生においては、向社会的な嘘は友人関係の良好さと負に関連し、友人関係の良好さの低減を介して、抑うつと正に関連していた。その一方で、高校生では、向社会的な嘘と友人関係の良好さに関連が見られなかった。なお、中学生と高校生の間で向社会的な嘘の使用傾向に違いは見られなかった。

研究4~6の結果から、向社会的な嘘は、従来考えられていたような対人関係を良好にする適応的な機能だけでなく、抑うつを高める非適応的な機能を併せ持つこと、また、この非適応的な機能は青年期において一貫していることが示された。これらの結果から、向社会的な嘘に依存したコミュニケーションは、少なくとも青年期においては、内的適応に悪影響を及ぼす可能性が示唆された。加えて、向社会的な嘘が抑うつと関連する過程には、学校段階による違いが見られ、中学生では向社会的な嘘の使用は友人関係を悪化させ、対人疲労感も生起させるものの、その後、高校生、大学生と、学校段階が上がるにつれて、向社会的な嘘の使用は友人関係を良好にし、対人疲労感を生起させなくなることが示された。

第5章では、6つの研究に関する総合考察を行い、今後の課題と展望を述べた。先行研究からは、向社会的な嘘が、発言者と被発言者の二者関係を円滑にする個人間機能を有することが示されてきた。本論文では、向社会的な嘘が、周囲の第三者に対して、関係を築き、維持するに値する人物であることを伝えるシグナルとして機能すると考え、向社会的な嘘が持つ個人間機能について、第三者の評価の観点から検討を重ねた。その結果、向社会的な嘘は第三者から肯定的な評価を得やすいことが明らかになり、向社会的な嘘は二者関係だけでなく、周囲を取り巻く人々との関係を良好にする可能性が示唆された。本論文には、これまで示されてきた向社会的な嘘の個人間機能に関する知見を拡張し、精緻化した点で、学術的な意義がある。また、本論文では、向社会的な嘘の個人間の適応に関する機能だけでなく、個人内の適応に関する機能についても包括的な検討を行った。その結果、向社会的な嘘は、対人関係を良好にする適応的な機能だけでなく、精神的健康を脅かす非適応的

な機能を併せ持つことが実証された。この知見は、向社会的な嘘に対する認識の再考を促すとともに、対人関係を良好にしつつ、個人の精神的健康を維持するためのコミュニケーションのあり方を考える契機となる点でも意義があるといえる。

さらに、本論文では、向社会的な嘘が抑うつと関連する過程とその発達についても検討を行った。その結果、青年期前期の中学生においては、向社会的な嘘の使用が友人関係を悪化させ、対人疲労感を生起させるものの、青年期後期の大学生になると、向社会的な嘘の使用は友人関係と対人疲労感にネガティブな影響を及ぼさなくなることを示された。ここから、青年期を通して嘘をつくスキルや状況に対するメタ認知が発達することで、向社会的な嘘の適切な利用が可能になるという発達の過程が示唆された。本研究から得られた知見は、発達段階にあわせたソーシャルスキルトレーニングなど、教育現場や臨床場面での実践に応用可能なものであり、社会的意義を有する。

本論文の課題としては、研究手法が、場面想定法による質問紙実験・質問紙調査に限られていたこと、向社会的な嘘の使用傾向の測定に自己評価を用いていたことなどが挙げられる。今後は、多角的な研究手法を用いて検討を重ねることで、本論文で示された向社会的な嘘の機能をさらに精緻に捉える必要があると考える。